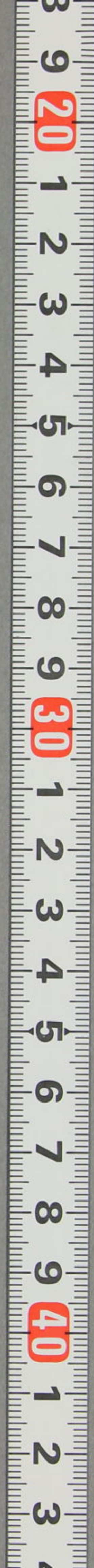




うしなひ  
後編  
中

^ 5  
4434  
5



門へ5  
覽 4434  
卷 5

衣 後編下



編笠之替

跡を山の中へは— びと蓬生れは原の  
あつむ蓬葉の落ぬる鬼の持しる字はさす昔  
暗明の原形の秘術を傳へて世に編笠とよみの  
ありそを戴りて出る時ハ車馬終るる市中をあけ  
らる人我をさすてやして朱符の夕られ日か燈乃  
暗りあるやとてあき人をもさすて追ひて常垂の  
のせとてり謹うらひのみきもさ人の果るのみさ  
是ハき強通用の字うして今泰平の世中よめ珍

録仕入

昭和九年  
九月二十九日  
購求





杖の門序

季真ハ今の巻を解き祐乗ハ洞の猿を彫て沼ま  
 突一風流ハ竹少年トモ沼をハいつこの誰トくろみ  
 くらんしきあら雪の流まふ手流りりくハ燈の  
 翁よ又六うを志くきくろ沼を冥加しきみく  
 くらんさるうくま右とまこい継てこま沼家の新  
 え世ありりくくのみ又まわくくくくみく  
 あくれくくく極樂の出店くくくあじん  
 姿も木の端の法師をくくく世も此得妻と附心  
 くて撰集一都をささいくあり品を沼腸のま  
 ありを同じく月花の方人とあくくくくくく  
 此唐の夕露ハ隣りくくく竹カラスのおくも縁言くく沼桶  
 の一ツもあくく壺子文君のくくくくくくくく  
 呼よ始もなく一人をくく懐もつる月ハ七家の暮  
 くるやくくく草の音樂もひくくくくくく  
 門の極樂とあくく杖子残さくくく迷子人ハ  
 迷いもすくく只このの法体助命の上戸と懐ら  
 くるく沼家の沼もくくくくくく

月花の下戸ハあき子や沼ま

壺子文

屋舞乃西菊に把茅の一序ありりくくくハ巻  
 法師のなをくくくありりくくくくくく  
 曰今世のさぬくくくくくくくくく人家あれ

と必佛あり我も甚遠きものぬらみあはれぬ  
咫尺は淨刹の多くとて朝夕數十歩と云ふ  
して餅は向ひまつせんやうに安んずるとする徳也  
乃遠きと云ふはすくすくして己の餅とばげと云ふ  
餅は向ひまつせんやうに安んずるとする徳也  
と只芭蕉翁の像一辨と刻す新子屋の年暮  
と云ふも我生庵あけらし遊ばふもくらし  
偏も蕉門の俳諧あはれあり和言縁語といふ  
漫筆の因とあるは蕉門のありるをわらふ  
同しと云ふの月もさうも我もさうも南家子  
老翁と昔は十月十日のころに云ふを  
らせしと云ふは世のつれづれに  
まはしと云ふは一時のつれづれに  
しき祥光ありと云ふは世の朝の光ありと云ふ  
のさしと云ふは一年の命ありと云ふは定ち同志の友と  
と云ふは一巻の糸と云ふはありと云ふは屋下  
は此道の光ありと云ふはありと云ふは祭奠と云ふは  
へくははは報謝の志と云ふは後世に強きと云ふは  
のさしと云ふは我の志と云ふは同朝の志と云ふは  
うらみと云ふはまをまをうらみと云ふは  
はねと云ふは

盆石記

盆石ありしをわらふと云ふは

あつて虎の怖くきおるり仕出さるるをよし  
虎に遇せざる人ありて実よそ人のこゝろあま  
しりしそてあけ石よ射し一石名をひまこに戀を  
とててらうしきハ少壯の比のこゝろにたすけり  
交まきく今も縁境の古くさけあましりしや  
け名の客とさうにさう天さうりりして年従  
谷遠くも裾にこもら一々の巖穴ありそを  
此名のさうさし一人一語の記を請りあつて巨  
多に壁き持来りたる毒公の御土地と結り  
あつてり人も今ハ文人のいふところ糟粕あり  
あつてり此ハ縁境の名あるのこゝろあつて天乃  
述べられませし一書場あれと名の傍の縁より  
あつハなも及りしとて十五巻の子の事と  
しり付を石よ削りあつて風騒の人のいふ  
あつてり人かすけり風騒の人のいふと文の  
名もよあつてしり詩に和言ハ俳諧よ只知ん  
井佛とのつらむあつてり

波と一石のこゝろ

悼子禮文

あつて十人の友と失ひしをむしりしハ  
あつてり甲あつてり又生れあつてり  
老く一人の友の別するハ菌のこゝろ  
生れ出るものこゝろ

くしく去れる子に為り睦月のたるあまうみ  
まうみよけ老一とい仕友のちとと遁れくまう  
強生を風籍に守せそまの友よ交れるも聊世  
のまを非を諦せりりまも人のまを頼とらりすく  
知らざるも知らざる如く知らざるもよ下向と耻を  
まらざるも深きれ鑑ありとあるも一ある人は称嘆  
せしむるも今や世の惜しみも尋常よるるり  
まして固一老のよれ恨一のまらりまらるる  
まらるる

魂よりり秋を心居れまらるれ

六十齡鏡

上壽ハ百甲中壽ハ八十下壽ハ六十ともハ蒲柳  
も花のみのりのりて六十の齡よありの壽の教ふ  
くまありくまありま月のまのまをせける日あり  
くまの人のかまとしてまらるるまらるる  
まあり男女のまのまをせけるまらるる  
ともまらるるまらるるまらるるまらるる  
まらるるまらるるまらるるまらるる  
まらるるまらるるまらるるまらるる  
まらるるまらるるまらるるまらるる  
まらるるまらるるまらるるまらるる  
まらるるまらるるまらるるまらるる  
まらるるまらるるまらるるまらるる

六十てまらるるまらるる







やまにされし楓の香きよりやれと経て深き  
二月の花より七知は枝柿の深きより甘れより  
味は空の糖は捨れるとさへ下戸の  
はつりてしよの香きよありてはの深きより  
金よりしきさうはま名の整と金とやうた子  
深き枝しきにまを甘あしく毎日昔の隣  
まは路をさうとへうとと舎敷きのこまは路  
路よりしき

贈石及法師一又

こころのあましきまは家持と蜷垣の  
まは路は血ありて新をを復ありく苦しき  
中くあましき猶も一石及法師を求えたるまは路の  
栖はかりより樹下石上のあましきされたり傍を  
いよのなるより流るる望もありの軒も只家  
のあつとて家よの学はるるまをさす又表の  
あましきあけと表顔のあましき捨るま安し  
津梁の丈志あましき一石井龍の雲はつり  
のまは路より辛ま地中のおまは路は  
我ましき

いとよめ安まきし一捨牛

深老井賦

瓜多よからけく子まき二月のお物と献とと

華清の温泉あり、亦事なりとよみ、いづれ  
心身の清りありん、それハまさるの遊いハ、  
原者の多きを、知く、それハ、  
其二つの間に湧出せる温泉井あり、  
亦、  
佛僧ヲ招ふ人あり、昔、  
の、  
より、  
み、  
以、  
う、  
ち、  
は、  
と、

岐岨賦

本名岐岨、古、

信濃ハ、  
封疆の内ハ、  
多、  
話、  
賦、  
と、



峯小舟の遊はすれゆる飛泉あると戸羅漆布の  
よも名をこすはさるは都に遠き恨ある心男灘女灘  
の契はうらむも連理の根は今名ありきあり  
烟の浅らふはこも境のへくも出ても清獄駒の坐高  
不郎のををこもせして富すもも肩を並よへ  
のまのの齡は死嫌ひの人よ美濃は巴女う常力ハ男  
猪ののまも名をこも心良材昔うと伐すもも  
屋傳子運いごと万家の用とをこも出して洞川  
漲る岩らとりもよハ高工の術は訓く曲業踏上  
の自在と傷く他郷の及ふよあはれ神風や伊勢  
のよよハ湯舟次よりもある例もを福島よハ開門あり  
て流るせりも備へまなく歸のときらも申さるるハ代  
山村氏のあつらひするちりあり南よは流湯明神徳の  
明井ハ小幡交福利よハ定勝寺長福寺興の觀  
音堂の觀音様の峯ハ相傳の古迹根の井の  
峯ハ火とかりともとりはせの浮石明早うハ釜  
ハ橋伊勢川橋清川橋橋坂の橋ハ是岐岨と橋下  
を分てる堺ありうは佳境にみま風物よはれ  
と石のまら茶と一も十名峠の名に移るは俳諧  
骨張の古松とありてまは峠を越るも難し  
正月のこも守ハまら報者々の風俗ありまの好いよ  
ハ本号踊の風流あり物ハあはれともる市と賑  
業ありハ年ハ尾府より尋すハ東都ハ秋とる  
椽けやまのまらまらあま田舎に製してをまら取ま

乃ち又とと求むをくはるふ干瓢岩年 菜高まは  
殊又佳名ありて名月方の妻と書きて末川の女  
風味又世に超へりていふ言深きあるまじの氣はく  
まぬ又ふくまはて秋の紅葉ハ里に生るら折信濃ハ  
十郡の賦堂一國の半ともそく人ハ只そまきま  
属するものも幾と推きよものつゝぬ

四州亭記

尾府の西に一亭ありて四州亭と名づくこと  
濃ハ勢のつらと兼く一と名の内ハ入るなりそ  
一と名に入るなりつゝあるものこととていふ  
いふ妓を推して東山ハちりりつゝ山ハ  
移文のうき名もよりつゝやう人ハ今程仕方の  
身に一あきは終終とてつゝあ山ハ侶ある  
そのつゝ此亭のわらふつゝ西の山ハつゝ  
その低の空淡濃のつゝ服と推してつゝ山ハ  
そらつゝあり仁者の地とつゝいふハ程  
あはてつゝ論をて深くま母の奥とつゝ身  
の隠れ家と求む者ハ偏ハ山の世に遠き寂寂を  
あはる者あり笏と柱ハ簾と推してつゝの  
つゝと情むハ山の風景とあはる者ハつゝ  
靈連の寂ハ烟と推してつゝ山の寂寂を同  
を物とつゝつれの堂を推してつゝ夫ハ國一  
名山とつゝあつゝと烟と推してつゝ眺むの上





あらききく少鴛やあり〜むらびまむ蛙も俳諧  
〜と鳴るる〜あつる世の俳人〜うらみ七  
みかりよ〜只俳諧の文章ハ新〜風俗文選世々  
ゆりま〜其体と学よ者のら〜あま〜いよ  
もの甚稀あり古人の文〜もそ風体らみど  
此あのみよと評らる〜い〜あせし  
夢よととり〜くハ甚あのみよ正〜して俗中  
ハ雅と失り〜く〜とあま〜人の編〜お穢ま  
ち〜〜花のゆ〜のなれ〜と田樂園子よ  
よと少きと茶〜り飲〜く〜い〜如〜其位  
ハ至〜ぬ人の及よ〜や〜らん東花坊支考  
〜ハ〜〜〜〜〜  
怯〜〜合ま〜〜〜〜諸君ハ務〜る當  
世男の〜の因〜と縁〜り〜おの〜り〜  
〜〜〜〜の許ハ〜物の姿〜とよ〜〜と  
飾〜に〜れ〜れ〜や〜甲〜に〜似〜れ〜と〜  
雅〜の〜ま〜に〜あ〜〜と〜何〜の〜思〜ら〜  
人〜と〜あ〜〜と〜あ〜〜と〜あ〜〜と〜大〜  
肩〜り〜〜〜〜あ〜れ〜〜〜〜に〜人〜あ〜〜〜  
餘〜碌〜〜〜〜端〜及〜と〜只〜和〜漢〜の〜餘〜り〜古〜體〜と〜  
俗〜の〜諺〜も〜入〜〜り〜ま〜ね〜と〜判〜ら〜〜あ〜ら〜  
と〜端〜め〜ぬ〜ま〜と〜こ〜れ〜〜と〜俗〜あ〜〜と〜雅〜の〜と〜ま〜  
〜〜〜〜〜と〜あ〜〜と〜と〜と〜調〜い〜る〜文〜章〜  
〜ら〜海〜に〜新〜〜〜と〜や〜ハ〜友〜友〜護〜花〜美〜の〜六〜林〜子〜

文章草草に玉さしつゝ錦と綴せり家老  
目と驚きしてこの金を遊ばし地はさるへん  
中州誰か其右に出むさねも音とある人の稀き魏  
洋もいさゝか猫の小判の耳あれをとして白く  
光を世にあらさす只独の樂とすはるる  
輯編しつゝ平よ小序と求らる久しく金葉の  
契ありつゝ辭すありさゆへあつゝ不才の稿ゆ  
探りつゝさし出さるゝ又さし出さるゝあり  
世に呉振と南の家の子織子紗後綴紗ハナの店  
庫に満ちしれども入口の暖簾を必事締と  
用せし店を尋る人のまつさし目とるれども  
暖簾ハナ地相のよありありとされい家の本締の  
才を以て娘にさしれ暖簾を掛むいさゝか店也  
の價をあげんやつゝありさからす序をく綴る女

鹽号説 為紺を巴良

我が方多針と世にさしつゝ昔男の昔をまはせ  
芥川のうけと娘あり名のなまを切られ詩賦は秀  
しきらら一人の海を掛のしきりて胡とさる  
の焼餅さくさくありさしつゝさしつゝさしつゝ  
風鈴ゆらゆらと響る風とさる道にあつゝ  
又まよひつゝと響とまはさす家老のさしつゝ  
是人の物にまはるありつゝのつゝ華を南は西  
の連歌にぬるありつゝのつゝ宗徳と招きつゝ

片の奥好は及ひるる、我の句れは、當りく、葉一  
入る付喜に人の喜あひく、僅十一二錢の胡椒  
を煮る者ありおし、も店に葱并の人あきとてそ  
糸句と惜ぐを依に譲りて、そをたを之胡椒と  
高いを、一と字低を、許く感、一世るる、  
人の連歌を、けりく、そを、さ、りあれと、孫多子  
稱、多、り、と、そ、多子、俳諧に、耽、り、も、け、り、あ、り、  
高、り、と、り、を、破、り、家、を、活、り、と、既、往、子、鞋  
の、先、雖、ち、よ、き、り、と、り、と、これ、と、あ、り、く、似、博、愛  
も、博、愛、亦、も、同、一、つ、と、ある、俳、諧、ある、一、或、ハ、あ、り、  
身、持、り、く、家、守、り、と、り、る、者、と、り、と、必、り、と、し、俳、諧、ハ、  
け、り、と、り、と、り、の、俳、諧、ハ、あ、り、と、り、と、り、の、俳、諧、ハ、  
第一の、喜、公、と、り、り、と、り、の、喜、公、と、り、の、喜、公、と、り、の、喜、公、と、り、  
も、風、雅、を、勉、け、り、と、り、の、俳、諧、の、妙、處、も、り、と、り、  
今、や、其、居、の、事、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、  
藍、光、舎、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、  
藍、光、り、出、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、  
名、も、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、  
と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、

聯句 異例

そを、味、子、槐、安、へ、あ、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、  
あ、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、  
と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、

そまゝ女老僧の訪ひきて半は用詩をすいつこ  
よすむ人そと同へて通す方の心よすむとあつま  
いふ根同よ及すし聯句せんとよめりて接抄乃  
あめいと唱はる妖僧云秋の月と吹しや雑歌の  
二やまに玉きそはて屋をそらけりてやまハ  
又の夕アとゆゑを送れそあまら女はよ兼園子の  
あまもそとてとくそこの火の僅よ隔るり

接抄

雖汲水無葛

可涼風在露

庭<sub>ハ</sub>庭<sub>ニ</sub>松<sub>ノ</sub>氣<sub>色</sub>

山<sub>ハ</sub>月<sub>ノ</sub>邪<sub>魔</sub>

長<sub>ハ</sub>吐<sub>レ</sub>夜<sub>方</sub>冷<sub>シ</sub>

大<sub>ハ</sub>跳<sub>レ</sub>盆<sub>亦</sub>過<sub>ス</sub>

酒<sub>醒</sub>慙<sub>ニ</sub>嫁<sub>ノ</sub>

茶<sub>沸</sub>饗<sub>ニ</sub>婆<sub>ノ</sub>

擇<sub>レ</sub>日<sub>ハ</sub>四<sub>火</sub>灸<sub>ス</sub>

儀<sub>ハ</sub>春<sub>ノ</sub>万<sub>葉</sub>款<sub>ス</sub>

邊<sub>ハ</sub>櫻<sub>留</sub>記<sub>念</sub>

歸<sub>雁</sub>惜<sub>余</sub>波<sub>ヲ</sub>

借<sub>宿</sub>疑<sub>弘</sub>法<sub>ヲ</sub>

換<sub>題</sub>試<sub>頓</sub>阿<sub>ヲ</sub>

耳<sub>言</sub>牽<sub>油</sub>笑<sub>ヲ</sub>

口<sub>説</sub>入<sub>牀</sub>和<sub>ヲ</sub>

截<sup>キル</sup>指<sup>サ</sup>女<sup>メ</sup>郎<sup>ノ</sup>折<sup>ヒ</sup>誓<sup>ヒ</sup>  
 沙<sup>サ</sup>掌<sup>ス</sup>腰<sup>ウ</sup>祖<sup>ソ</sup>父<sup>フ</sup>痴<sup>チ</sup>  
 移<sup>シ</sup>敷<sup>シ</sup>残<sup>シ</sup>暑<sup>シ</sup>褥<sup>シ</sup>  
 脱<sup>ト</sup>曬<sup>ス</sup>有<sup>ユ</sup>明<sup>メイ</sup>蓑<sup>サ</sup>  
 濱<sup>ハマ</sup>市<sup>シ</sup>初<sup>ハツ</sup>鮓<sup>ソ</sup>貴<sup>キ</sup>  
 辻<sup>ツジ</sup>能<sup>ネ</sup>油<sup>ユ</sup>虫<sup>ムシ</sup>多<sup>タ</sup>  
 花<sup>ハナ</sup>開<sup>キ</sup>粧<sup>シ</sup>寺<sup>テ</sup>院<sup>イン</sup>  
 折<sup>セ</sup>動<sup>ドウ</sup>彩<sup>サイ</sup>溪<sup>シ</sup>河<sup>カ</sup>

後うろく衣室屋より明承の末よりお掃屋  
 の遺跡をとりてこねさうらうら

くら母 惣

